

■糖尿病内分泌内科

1. 2021 年度の目標及び方針

計画①

内分泌疾患診療の更なる充実

原発性アルドステロン症に対する副腎静脈血サンプリングのみならず、甲状腺細胞診、膵内分泌腫瘍に対する選択的 Ca 動注試験、下垂体上脈血サンプリングなどの当院の取り組みを他医療機関への情報発信し、紹介などを通じて症例数を増加させ、他科との連携を高め診療の充実を図る。

計画②

研修医、医局医師に対する教育・指導の強化と科の更なるレベルアップ

引き続き、アップデートな内容を取り入れた広範囲かつ専門的な内容の講義と実際の診療とをリンクさせながら個々の能力を赤目、科のレベルアップを図る。

計画③

スタッフの増員

引き続き Web 等での説明会を行いながらスタッフ増員を目指す。

計画④

糖尿病診療の効率化

コメディカルスタッフとの連携を再確認し、糖尿病診療の効率化を行う。

2. 2020 年度評価

計画①

糖尿病内分泌内科スタッフの増員

Web 等での入局説明会等を通して入局志望者を募集する。

最終実績：Web での入局説明会を施行したが、希望者は 3 名で実際の採用には至らなかった。2 名が入局したが 2 名は科としての常勤を外れ、±0 の結果であった。

計画②

内分泌疾患症例の更なる拡充

引き続き、周囲医療施設等と情報交換の場を設け症例の拡充に努める。

最終実績：COVID 19 の感染拡大のため周囲医療機関との直接的な情報交換の場は気づけなかったものの当院への紹介患者数は増加しており、原発性アルドステロン症を含めた内分泌疾患の症例は増加している。また、希少な症例に対して他施設へ依頼し遺伝子検査等や論文発表も行った。

計画③

当科および他科医師の教育の充実

講義や症例の検討等を通じ若手医師への教育の充実をより一層図る。

最終実績：可能な限りアップデートな内容を携りいれながら幅広い分野に対し講義を行った。また、学会での発表、論文発表などでより個々の知識を深めた。

計画④

新たな糖尿病診療体制の構築

最終実績：

IT を活用しての新たな診療体制の構築の模索を行ったが実現には至らなかった。

3. 科(課・室・委員会)の年間活動内容(試みや特徴など)と紹介

科の特性から外来診療が主であり、診療疾患は頻度から糖尿病、甲状腺疾患が絶対数として多いものの視床下部・下垂体疾患、副腎疾患、副甲状腺疾患も多く対象疾患は豊富である。入院診療では、糖尿病の教育入院、他科からの血糖管理を主体としたコンサルト、内分泌疾患に関しては診断のための各種負荷試験や副腎静脈血サンプリング、下垂体静脈血サンプリング、選択的 Ca 動注試験等の侵襲的検査、稀な症例の遺伝子診断等を積極的に行っている。週1回、4例程度、エコー下甲状腺細胞診(穿刺ガイドを使用せずフリーハンドの細胞診)を行い若手医師の手技獲得や病理診断に関し病理医と連携しながら所見の確認を行っている。

4. 実績(症例件数や手術実績等)

甲状腺エコー下細胞診は138例で、class IIIb 1例(乳頭癌)、class IV 3例(乳頭癌2例、髓様癌1例)、class V 16例(乳頭癌14例、腎癌転移1例、リンパ腫1例)であった。濾胞癌1例はclass IIでありエコー所見とともに腺腫様結節との鑑別が困難であった。Class III症例にはリンパ腫1例が含まれエコー所見上、慢性甲状腺との鑑別が困難であった。原発性副甲状腺腺腫の原因病巣が画像上明瞭ではない2症例に関し細胞診洗浄液中の intact-PTH の上昇から確定診断を行った。エコー所見から悪性を疑ったがclass IIの症例は6例あり、class IIIb~class V症例の中でエコー所見上、良性病変と判断したものは5症例存在し、今後も症例の集積と症例により細胞診の再検が必要と考えられる。検体不適正は3検体のみであり細胞診手技は向上している。入院では視床下部・下垂体疾患に関しては、プロラクチノーマ1例、抗PD-1抗体によるACTH単独損症2例、抗PD-L1抗体によるACTH単独欠損症1例、ラトケ嚢胞、empty sella、pituicytoma、耳下腺腫瘍による汎下垂体機能症が1例ずつ、下垂体静脈血サンプリングにて下垂体性クッシング症候群と診断したが、その後の経過から異所性ACTH産生腫瘍と考えられる1例、中枢性甲状腺機能低下症1例であった。Kallmann症候群症例に関しては多施設にて遺伝子解析を行ったが、既報の遺伝子異常は認められず新たな遺伝子異常の可能性が考えられた。副腎疾患に関してはサブクリニカルクッシング症候群2例、原発性アルドステロン症例で副腎静脈血サンプリングを施行した症例は19症例で両側性が17例、片側性は2例であった。片側症例は病側副腎摘出を行い、アルドステロン値の改善を認めている。その他、偽性副甲状腺機能低下症1例と稀な疾患を認め、今後遺伝子解析を行う予定である。

5. 学術関係

学会発表

小川 理, 糖尿病初診患者に対するタブレット端末を用いた事前問診が診療時間などに及ぼす影響の探索的検討、日本糖尿病情報学会 2020.09

西田 藍, 当院での免疫チェックポイント阻害剤関連ACTH分泌不全症12例の検討、日本内分泌学会 2020.08

相川 未希, SGLT2阻害薬中止3日後の手術中に正常血糖DKAを来した1例 日本内科学会-関東地方会 2020.11

瀧澤 裕樹, 糖尿病ケトアシドーシス発症時に内因性インスリンが枯渇していなかった急性発症1型糖尿病

の1例、日本内科学会-関東地方会 2021.02

瀧澤 裕樹, ACTHの低下に先行してコルチゾールの低下があり原発性副腎不全が疑われたACTH単独欠損症の一例、日本内分泌学会 2020.08

瀧澤 裕樹, 人間ドック受診者を対象とした指尖自家蛍光強度の規定因子に関する検討 日本糖尿病学会、2020.08

西田 藍, 令和元年台風15号通過後の真夏日、長時間停電時におけるインスリン保管状況に関する質問票調査、日本糖尿病学会、2020.08

藤本 隆史, 膵びまん性病変が示唆されたグルコース反応性インスリノーマの症例、日本内分泌学会 2020.08

論文

Miyoshi Yuka, Ogawa Osamu, Nishida Ai, Masuzawa Masahiro : Recurrent hyperglycemic hyperosmolar state after re-administration of dose-reduced ceritinib, an anaplastic lymphoma kinase inhibitor, Diabetol Int, 2021.01, PMC7790956